
え・・・？祓魔師って？？

ゆずぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

え・・・？祓魔師つて？？

【Zコード】

Z8098W

【作者名】

ゆずぽん

【あらすじ】

相良ユズは、15年前青エクの最新刊を買った帰り不思議な声と光に包まれた。気が付くと真っ白な部屋に顔だけはいい神様がいた！神がいうには光の正体はイノセンス？！しかもクラウン・クラウン？！アレン・ウォーカーとなつてDグレの世界に・・・そして今青エクの世界にアレンとして行く事に！？

プロローグ（前書き）

よつじーそー！来てくださいとも嬉しいです。
この作品は青の祓魔師を中心とした二次創作作品となります
その為原作のネタバレとなる部分もあります
そのことを了承の上、先にお進みください

プロローグ

初めまして！元女子高生の相良コズです。今は転生してアレンと名乗っています。

知つてる方も多いかと思います。ある物語の主人公になつてます
www

えーっとですね・・・此処どこつスか？？

こんな全て真っ白な部屋一つしか知らないんですけども・・・（汗）

『よお。久しぶりだな、コズ。今はアレンだったか？会いたかったぞ〜。』

「やつぱりお前か クソ神！私は会いたくなかったよーー！」

『アレンのキャラ崩壊してんよー（笑）』

はつーしまつた！落着け自分。こんな奴相手にするな。

「・・・「ホンッ。お久しぶりですね。それでビックリした用件なん
です？」

『アレンの力にも慣れただけじ、そろそろ本命のあの世界へ行つ
てもらおうと思つてな。』

「はあ？」

『いや言つたよ？アレンになる前に言つたよ？えつ、ちよつとその
顔やめてくんない？馬鹿にするか憐れむかどちらかにしてええ！
！』

「じゃあちよつとー5年前を思い出してみよー。」

『スルー？！まさかのスルー？！「うぬやこですょ。クラウンベル
トvvv むぐおおおつ！…』

プロローグ（後書き）

はじめまして！ゆずぽんです
勢いに任せて書き出したお話です
しかも初めてなので、間違いなどもあると思いますが、
あたたかく見守っていただけないと嬉しいです
頑張つていいくのよろしくお願いします

第一話 15年前、やして神との出来事（前編）

読んでいただいた方にとっても感謝です
休みの間に出来るだけ投稿したいと思つてます

第一話 15年前、そして神との出会い

（15年前）

私相良ユズは、漫画と小説が好きでとくにログレイマンと青の祓魔師が大好きだった。

それはきっと主人公が自分と似てるから、かもしれない。私の親はある事件に巻き込まれ、5歳の頃に亡くなった。

私は事件のせいでトラウマや恐怖症関係が面倒だったのか、紅と灰色のオッドアイが気味悪かつたのか、事件のショックで持つてしまつた異様な力に恐怖したのか。

親戚にたらい回しにされ続けた。結果、今は仕送りをしてもらいバイトをしながらひとり暮らしをしている。

異様な力というのは一種の霊能力だ。視たり触ったりもできるので、ちょっと手助けをしたりもする。それに何故かすごく好かれてしまつて「ユズ様!」「主様!!」などと敬われる。手助けは大変な事も多いけど正直この力を持ち、皆が観えて触れられて話せるのがとても楽しくていつも救われてきた。

「ユズ様〜！青エクの最新刊あつて良かつたですね〜！」

「ほんとだよね～。まさか学年主任に雑用頼まれるとは思わなかつたよ。」

しかも職員会議で使う資料をホツチキスで止めるだけ……自分でやれよ!!!!

あつ今話してるのは土地神の名歌君めいか！あだ名はメイちゃん＼犬みたいです♪ぐく可愛いｗｗ

「でもまあ、新刊買ったから許してやひつー！」

おつと、シユウさんが移りちゃったゼイ

メイ「コツコズ様！！青エクが光つてます！！！汗」

「へ？おおおおおおーー何これええー！」

『…………わ…………え…………えよ。』

「誰？！」

『…………れ…………の…………声…………に…………よ。』

メイ「 ユズ様！！その光から声がつづーー。」

ユズ「 メイちゃんも聞こえるの？ー。」

『 我の声に答へよ。神に選ばれし異界の使徒よ・・・。』

ユズ「 はい？？ あつ！ー！」

なにつ意識が・・・もつてかれ・・・るつつ

メイ「 ユズ・・セ・・・・・・」

ユズ「 ・・・此処どこのの・・・。」

? 『 わはよーー。』

〇へ～！～金髪イケメンだ～。

? 『 これ1巻ない？面白いんだけど
んじやボケい！！！』 ぐふおおおおつーー。』

「 なに人が読む前に読んで

ユズのアッパーが決まった！謎のイケメンは300のダメージを受けた！！

?『ゴホゴホツいついいアッパーだねっ！流石だねユズ。』

ユズ「名前まで知ってるなんてストーカー？！イケメンがもつたしないぞ。」

?『ストーカーじゃないよ！！イケメンなのは認めるけど「そこは認めんのかよ。」俺は神様だよ。』

ユズ「精神科行けば？？」

自称神『そんな憐れんだ目で見るのやめてえええ！！！って何？！この自称神って！自称じゃないよ！！本物の神様！！！！』

ユズ「うるさいんだよvv黒笑」

『ぎいやああああああああ

そして10分後

ユズ「それで、神様が私に何の用なの？私の青工クを光らせて声かけてきて。（イライラツ」

神『それは俺じゃない。クラウン・クラウンだよ。』

ユズ「いつの間にかボロボロになつた神様は真剣な目で言った（笑）

「

神『声にでてるよ～。』

ユズ「わざとだしてんの。」

神『泣いていい？俺もう泣いていい？？いいよね？…』

ユズ「…あれ？すごく聞いたことがあるんだけど。『スルー？スルーなの？！！』もしかして…」

神『ぐすん・・そう！君が好きなDグレイマンの主人公アレン・ウォーカーのイノセンスだ。イノセンスが異界にいる君を選んだんだ。

『

ユズ「うわ、持ち直したあ・・・。(ひまつと待つよーじゅあ
アレンはどうなるの?ー!」

神《ユズがなるんだよ。》(ニコニ)

ユズ「はああああああ
? ? ! ! !

第一話 15年前、やして神との出合 (後編)

もつべし15年前の話が続きます
なるべく早く青エクの世界にいきたいと思こます!

第一話 少しの眞実と新たな旅立ち（前書き）

15年前についてが長くなつてしましました
いよいよ旅立ちです
やつと青エクにはいれます・・・。

第一話 少しの眞実と新たな旅立ち

ユズ「つまり私にアレン・ウォーカーとしてログレイマンの世界に行けっていうこと? ?」

神《うん。あつ女の子のままだから安心してー》

ユズ「じゃあネアは?! 私の中にいるの? ?」

神《14番目のことだね。実は14番目破壊のネアは
の血の繋がった父親だつたんだ。》 アレン

ユズ「うそ・・・。じゃあアレンはネアからノアの力を受け継いで
しまつたってこと? ?」

神《そういうこと。原作でアレンとネアが出会えたのは、アレンの中にあるノアの力がネアを記憶していたからなんだ。だから時々しか会えないし、ネアには何の力もない。つまり宿主ではないから自分の意識も保てたり大切な人を殺さなくてもいいんだよ。》

ユズ「よかつた・・・。」

神《せめてそろそろ行こうつかーー扉オープンwww(↙↙↙)》

ユズ「顔文字とかすゞぐわざつーつてかドアの中からどこかで見たことある田と黒い手があーー鋼鍊じやんー思いつきし鋼鍊じやん!ー?」

神《頑張ってねユズ。アレンとしての役目が終わったら、居るべき世界へ返してあげる。「手につかまれた————」の世界に、ね。つて最後まで遮るんだね(泣)》

ユズ「え?何の世界つて?ーー?」

神《またここに来たらこいつよ。》

ユズ「ふざけんなあーーあ、メイちゃんは?ーー」

神《元の世界にいるよ。》

彼の居るべき世界にねーー。まだ言わないけど(×××)

ユズ「メイちゃんに会つたら言つてこーー。いつできまわつて。」

神『！クスツ分かつた。』

コズ「後今度会つたらあんたぶん殴るからミ覚悟しておいてね＼黒笑」

神『ええ？！今いじ感じで決まつてたよ？！』

最後に聞こえたのはあのクソ神のウザつたいツツ「//」だった。

コズ「言つてねえじやん！…！」

神『ふふおおおーー』

コズの右フックがきまつた！神は400のダメージをくらつた！

神『言つたよ！…遮つたのコズじゃ　　「ああ？」　ハイ、僕ガ言
ツテマセンデシタ。申シ訳アリマセンデシタア！…』

コズ「はあ。（アレンモード）それで？私のいるべき世界って何処なんですか？」

神《切り替え早っ！えつとそこは君が生まれた本当の世界なんだ。》

ユズ「私が生まれた世界??」

神《そう。君は唯一悪魔に愛される存在だった。そのせいで悪魔たちの王にまで気に入られてしまった。俺は頼まれて君を安全な世界へ送った。せめて奴らに対抗出来る力を得るまで・・・。送った先の親は家の玄関に居た籠の中の君を、あの事件が起こるまで大切に育ててくれた。でもまさか神の結晶までもが君に惹かれるとは予想もしなかつたけどね。》

ユズ「その世界つて・・・青エク??」

神《そ�だよ。そして君の本当の親は
藤本 獅郎だ。》

ユズ「え・・・・えええええ！－！？？？はつ母親は？！」

神へ凄い人だぞ？名前はフレア・ログフォート。聖母マリアの子孫で聖騎士の補佐官をしていた。聖母マリアは悪魔にも愛されていた

らじいから、ユズも受け継いだんだろうね。』

ユズ「・・・生きてるの？？」

神『残念ながらユズを生んでもすぐに亡くなつた。藤本は俺を特殊な魔法円で召喚し、君を託したんだ。』

ユズ「そつか・・・獅ろ・・父さんは原作のままいくと死んでしまつ・・・。」

神『変えるんでしょう？？』

ユズ「当たり前！！（一ヶ）

父さんは死なせない。アマイモンも死なせたくないし・・・原作ブレイクするしかないっしょ！――

神『よしーじゃあさっそく扉オープン（。 。 ）』

ユズ「だから顔文字つけつつーーってまたこれ？！鋼錬パクつちゃつていいの？！真理怒らないのー？！」

ユズ「まぢでええ？！あ、掘まないでーーー！《またね、ユズへへ

》気持ちわる
「バタンッ

扉が閉まり部屋には静寂が戻る。

神《どうか今度こそ彼女に祝福を・・・》

そしてアレン・ウォーカーとなつたユズは青エクの世界へ旅立つた。

第一話 少しの眞実と新たな旅立ち（後書き）

ユズの親凄すきー！

次話はユズの紹介です

主人公設定（前書き）

今日は主人公ユズの紹介です
そしていよいよメイちゃんも・・・？！

主人公設定

転生前

名前：相良 ユズ（さがら ゆず）

性別：女

年齢：16歳

顔：中性的だが可愛い系に入る。目は生まれつきオッドアイ。右が灰色左が紅あか

特殊能力：霊能力。昔から幽霊や妖怪や土地神などと話したり、遊んだりしていた。また、力が強いらしく彼うことも出来た。

転生後

名前：アレン・ウォーカー

性別：女

年齢：0歳から生き、原作通り15歳で教団に入ったが神の所へ戻った頃はもうすぐ16歳になるところだった。

顔：原作通りの顔に少し可愛さを足した感じ。ゆずぽんとしては天使と呼べる可愛さ　～髪の毛は鎖骨あたりまで伸びている。

特殊能力：霊能力。

クラウン・クラウン 原作通り

ノア ユズではなく、アレン自身の親が14番目だった。なので、宿主ではなく遺伝として受け継いだため自分で力を操れる。

アレンは「創造のノア」

ネアの場合「破壊のノア」だったが

創造のノア その場にあるものを思いのままに操ったり、作り直したりできる。鍊金術のようだが、等価交換は無視！量だつて数だつて増やせる。（例：一個の豆から ジャックと豆の木 みたいな木を作れる笑）

* 青エク*

上のアレンの設定に次のことを足します。

ユズは青エクの世界の住人だった。

父は聖騎士である藤本 獅郎。母は元聖騎士の補佐官で聖母マリアの子孫フレア・ログフォート。フレアはユズを生んですぐ亡くなり、力が受け継がれたことを知った獅郎が神にユズを安全な世界へ送ることを頼んだ。

特殊能力：霊能力 実は母から受け継いだ聖母マリアの力だった。一部の悪魔以外には愛される存在となる。祓う力も強く詠唱の一部分やオリジナルで祓うことが多い。

使い魔：めいか名歌めいかあだ名はメイちゃん。ユズとして生きていた世界で親友だった土地神。しかし実は上級悪魔の狼牙。

使い魔2：アマイモン。あだ名は縮めてアモン、アモン君。どうやって使い魔になるかは本編を読み進めてください

主人公設定（後書き）

設定はご理解いただけたでしょうか?
分かりにくい設定で申し訳ありません
次話からユズをアレンと書きます!!

第三話 初めまして異世界（前書き）

学校があると帰りが遅くなるので投稿が遅れてしまします
申し訳ありません
いよいよ青エクの世界へ突入です！！

第三話 初めまして異世界

アレ 「前みたいに空から落とされずには済んだけど・・・」

ザアアアアアアア
ツ

アレ 「土砂降りの中、扉を学園の校門に繋げるなら、学園の中でも濡れない場所に繋げて下さいよ・・・」

？？ 「貴女がアレン・ウォーカーさんですか？？」

後ろから急に声がした。アレンは声の主の方へ振り返った。

アレ 「メフィスト・フューレスさん・・・ですか？？」

メフィ 「神に聞いたとおり知っているようですね 傘に入りなさい。
風邪を引きますよ。」

アレ 「ありがとうございます。っくしゅんー！」

メフィ「おやおや。理事長室で暖かいミルクティーでも飲んで温まりましょう」

メフィ「お砂糖は一つどうぞですか??」

アレ「あ、はい。ありがとうございます。いただきます。・・・
あ～美味しい・・・なんか久しぶりの和み。

メフィ「口に合いましたか?」

アレ「はいーとても美味しいです。」

メフィ「・・・フレアさんそつくりの笑顔。アレン・ウォーカー
とこいつになつてもやはり親子なのですね。」

アレ「…母と私知つてゐるんですか?ー」

メフィ「もちろんです！貴女の父、藤本獅郎と私が友人なのは」「存知ですか？フレアは元は私の友人で彼に紹介したんです。つまり二人のキューピットは私なんですよ」「

アレ「キューピットオ？！メフィストさんが？！？」

ペニロの間違えじや・・・。

メフィ「ペニロではないですよ」「

」の人心まで読めるの？！

メフィ「声にてました。」

アレ「すみません・・・。」

メフィ「フフッ気にしてません。フレアにもよく言われてましたから。性格までそっくりなようですね。・・・さてこれからのことを持ちましょうか。ああまずこの手紙を読んでください」「

アレ「手紙ですか？げつ・・・。」

神からだ・・・。面倒だなあ。まあ一応見てみよう。

この手紙を読んでもるつてことは無事にメフィストのところに着いたんだね。実は君の能力について言つてなかつたことがあつたんだ。アレン自身の能力、クラウン・クラウンとノアの力はその世界でも使えるよ。

臨界点突破状態のクラウン・クラウンには退魔の力があつたよね？あれを使えば人に憑りついた悪魔も祓える。つまりきっと藤本にサタンが入つてもサタン自身を倒せなくとも藤本を救うことが出来るかもしない。

大丈夫。君ならきっと未来を変えられるよ。

マリアの祝福あれ

君に聖母

メフィス「…」

アレ 「…」

メフィス「やはりあの人は彼を利用するのですね。」

メフィストはいつもより少し悲しそうに笑つて言った。

アレ 「私が救います。父さんを・・皆を・・・。
奥村兄弟も、勝呂君達も、皆・・・。」

メフィ 「一人ではさせませんよ。」

アレ 「え？？」

メフィ 「私がサポートしていくます。」

アレ 「メフィストさん。」

この人がすごく頼れるイケメンに見えてきた(キラキラ

メフィ 「貴女は私の義娘になるんですからww」

・・・ん？義娘？・・ムスメ？？

アレ 「義娘
？！？」

第三話 初めまして異世界（後書き）

この小説では獅郎生存させちゃいます
そしてメフィストすごくいい人です
次から何話か主人公と獅郎の再会編にしようと思います

第四話 アレンの決意（前書き）

やっと第四話まできました
今回はメフィストとの絡みだけです
この小説ではとにかくメフィストがいい人です

第四話 アレンの決意

メフィ「落ち着きましたか？？」

アレ「なつなんとか……」

「こんなに取り乱したのは師匠の借金についてラビに聞かれた時以来だ……。」

メフィ「この世界には貴女の戸籍がないんです。しかし私の義娘となればなんとかなりますし、色々と動きやすいはずです。」

なんかすごく頼りになる雰囲気かもしだして「一番は可愛

い義娘が欲しかったからなんですけど」なかつたああああ！！！？

メフィ「近いうちに上へ挨拶をしに行きましょう。貴女の実力を少し見せねばある程度の地位を貰えるはずですvvvどんな顔するでしょうねvvvアハハハハハハツ」

ワオ、一気に悪魔みたいな笑顔に……おっと悪魔でしたvvv

メフィ「決めるのは貴女です。今決められなければ時間をおいてでも「義娘になりますよ。」！・・・そんな簡単に決めてよろしいんですか？？」

アレ「メフィストさんは、父と母の昔からの友達です。それに私は貴方達を元から知っていますし、直接会つて信頼できる方だと思いました。これからよろしくお願ひしますね。お義父さん！」

メフィ「！・・・フフツよろしくお願ひしますね。アレン。

あの、もう一度お義父さんと呼んでくれますか？？」（キラキラ）

「う

アレ「そういうえば、「スルーツ？！」これがスルーというものなんですね？」お父さ・・獅郎さんには会えますか？」

メフィ「私は気にせずお父さんと呼んでいいんですよ。今の貴方にとつては一人とも父親なんですし（ニコツ）彼ならしばらく任務はありませんから、協会にいるはずです。協会までの扉の鍵、スペアを作つておきますね。」

アレ「！私は幸せ者です。一人もお父さんができた・・・」
失くしてからずっと求めてた家族。自分が憧れてた世界。絶対守ろう・・・。そして青エクで一番好きなキャラ　　勝呂君とウハウハする――絡みまくる！――（実は作者も関西育ちで勝呂君が大

好きなんです^v^)

アレ「お義父さん……ウアチカン本部に行きましょ^v^…今すぐ行
わましょ^v^…」

メフィ「おや、急に^v^…したんだか?」

アレ「せつねじ上に話をつけて動けるよつに^v^して、お父さんと再
会しながら何も始められない気がするからー(ニカッ)

アレンの皿は何かを覚悟したような強くまつすぐな皿をしていた。

第四話 アレンの決意（後書き）

読んでくださりありがとうございました
話の内容に少しづずほんのことを使いました
ゆずほんも昔のことですが勝田鶴と同じで京都育ちなんですね！
関西男子が大好きです
次はいよいよ親子の再会！！

第五話 再会（前書き）

主人公が両親のもとへ！

第五話 再会

メフィ「いやあ、楽しかったですね～。まさか全部一撃で倒してしまうとは」

アレ「メフィストさんが悪魔を用意してるなんて予想もしてなかったです（汗）

え？何があつたかって？？私はつい1時間程前、この笑顔が悪魔なお義父さんとヴァチカン本部に行つてきたんです。しかも姿を見られないようにあつついフード付きの黒マントを被せられて連れて行つてもらつたんです。そうしたら上方達は実力で決めるとお義父さんに言つたんです。それを聞いた途端、この人・・・20匹程の中級悪魔を呼び出しやがつて、その次に上級悪魔10匹を休む暇なく呼び出しやがつたんです！－思わずクラウン・クラウンで握り潰しちゃいました（テヘッ

それを見た上方達驚きながら引いちゃつてました。でも実力は認めてもらえたらしく、なんと！－！

アレ「お母さんと同じ聖騎士の補佐官になるなんて・・・。」

メフィ「貴女の存在は上と私しか知りません。上は黒マントの貴女しか知りませんが。藤本君には」

アレ 「自分で知らせに行きます。お母さんのお墓にも知らせに行つてきます。」

メフィ 「ではこの鍵をどうい。 いつてらっしゃい。」

アレ 「…いつてきますーお義父さん（ニロジ）」

鍵を差し込み扉を開けた。

メフィ 「か・・・可愛いいいい www 今 のフレーズもう一度お願
いしま ガチャンツッ

アレンは迷わずメフィストの言葉を遮り扉を閉めた。アレンは少し
うぞく感じた・・・。

アレ 「…が正十字協会か・・・。あの、すみません!」

協会の前を掃除していた協会の人にフレアの墓の場所を案内しても

らい、獅郎を呼んで来てもらひ」とした。呼びに行つてもうつて
いる間、アレンはフレアの墓を田にして手を合させてからゆっくり
話し始めた。

アレ 「はじめまして。・・・久しぶりのまづがいいのかな?お母
さん、私コズです。今は色々あつてアレン・ウォーカーと言います。
私つい最近この世界に帰つてきました。そして聖騎士補佐官になつ
たんです!お母さんと同じですよ。」

ああ・・・涙出でう・・・。

アレ 「お母さん。私 「ユ・・ズか??」 「あつ
お父さん・・・。

獅郎 「ユズなんだろ・・・?フレアにそづくりだ・・・。」

アレ 「わづ私は」 ギュウツ

獅郎に抱きしめられるアレン。

獅郎 「生きててくれたんだな・・・。もう16歳か。大きくな
つたなあ・・・。」

ポタツポタポタツ

アレ 「...」

泣い・・てるの・・・?

獅郎 「生きててくれてつ本当によかつたあ、！！！」

抱きしめる力が強くなつた。

アレ 「つ今の私は転生してアレン・ウォーカーという存在になりました。外見だつて少し変わりました・・・それでも貴方は私のことを「娘だよ。」？」

アレンは獅郎の顔を見た。獅郎は涙を流しながら、微笑んでいた。

獅郎 「転生したつて、外見が変わつたつて関係ねえ。お前は・・・ユズは昔も今もこれからもずっと俺とフレアの娘だ。俺たちのたつた一人の愛しい娘だよ。」

アレ 「ひつく・・・わだしが！アレンになつたわだしが！貴方を父と呼んでついいんですか？」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながらアレンは獅郎に尋ねた。

「ここに来るまでずっとどこかで考えてしまっていた。もしかしたら拒絶されるかもって……。今頃会つても迷惑かもしれない。アレンとなってしまったのだから、ユズではないといわれてしまうかも知れないつて……。でも

獅郎 「当たり前だろ！… おかげり 」

「この人のこの笑顔を見たら自分が馬鹿だつたって思つて、私は思つたことを口にした。

アレ 「 ただいまーお父さん！… 」

二人はフレアの墓の前で、涙を流しながら笑顔で抱きしめあつた。その時かすかにおかれり、という女の人の声が一人には聞こえた気がした。

第五話 再会（後書き）

再会できて本当によかったです・・・
次はメイちゃんとの再会が??!

第六話 父親の半供れを知る メイちゃん登場!!（前書き）

もう一つ小説を書き始めたので
更新がますます遅くなりそうです
時間がかかるかもしれません

第六話 父親の下供を知る メイちゃん登場!!

獅郎 「そりゃ。お前が補佐官になるなんてなあ。フレアも喜んでるだろ? だが、メフィストがお義父さんひつのは許せん! ! ! あこつにアレンはやうん! ! ! !」

うーん。なんか嫁に出すのを反対してくるより、「許すも許さないもアレンはもう私の義娘になつてますし〜。」

アレ 「ぬおおひーいつから居たんですか? !」

メフィ 「わづか。といつ所からです 」

はー。つまり最初からいたんですね。あ、言ひ合ひ始めた。

「神父は一人で聖書でも読んでいなさい! ! ! 」「うるせえ! ! ! 僕あれ読むの嫌いなんだよ! ! ! お前が読めよ! ! ! 貴方は悪魔の私に死ねと言つのですか? !」

・・・餓鬼だ。

これからが心配になり始めたアレンだった。

「クウーン。」

アレ 「?何かいるんですか??」

獅郎 「ハアツハアツこのピンク魔人!!え?ああ昨日拾った犬だ。
見るか?」

アレ 「!…メイちゃん?!」

メイ 「ユズ様!!会いたかったです!!」

飛びついた名歌。それを抱きしめたアレン。

メイ 「あ、今はアレン様のほうが良いですね!」

アレ 「どうしてメイちゃんがこの世界に?」

メイ 「実は僕悪魔だつたらじいんです。」

アレ 「！メイちゃんが？！？」

メイ 「上級悪魔の狼牙らしくて、貴女が消えた日からずっとこの世界でお待ちしていました！」

アレ 「ずっと・・・私がクラウン・クラウンに導かれた日から、メイちゃん！..」 ギュウ

メイ 「僕はアレン様が大好きなんです。小さい頃からずっと一緒にいてくれただ一人の御方ですから！」

アレ 「メイちゃん！ありがとう！..これからもずっと一緒にいてくれる？」

メイ 「僕は貴女の使い魔となつてずっと一緒にいます！..昔貴女に助けられた分、これからは僕がお守りします！！」

アレ 「ありがとうございます！..これからもよろしくね！..」

メフィ「・・・あのすみません。そろそろ私達も会話に混ざりてもよろしいですか??」

獅郎「アレンの犬だったのか??」

・・・うん。二人のことすっかり忘れてました

獅郎「さうか・・・。名歌!これからも娘を頼むな!-!」

メイ「わんつ!-! お任せ下さい! 獅郎様!-!」

メフィ「契約はすでに終えているのですね?」

アレ「昔から一緒に居たので、いつの間にか契約していたみたいですね。!-そりいえばお義父さんはなんでここにいるんです??」

メフィ「私としたことが忘れてました。お一人に任務です 親子で初の任務ですよ~。」

獅郎 「げっ…もう少し休みたかった…。今からいけるか?アレン。」

アレ 「はい!メイちゃん!行きますよ。」

メイ 「はい!アレン様!」

アレ 「ではお義父さん!行ってきます。」

メフィ 「いってらっしゃい」

「ついでアレンは獅郎と名歌と共に任務へ向かつた。
学園へ帰るとメフィストと獅郎がどっちが父親にふさわしいか、
いつ言い合ひを3時間もしてアレンをキレさせたことは名歌しか知
らない。」

第六話 父親の子供たちを知る メイちゃん登場！－（後書き）

次はアマイモンとの絡みです
アマイモン可愛すぎるw w

第七話　この間いか使い魔に。そして義娘の反抗期？

メフィ「アマイモン……何故」で私のアレンとお茶してゐんです?
す?！」

アマイ「兄上お帰りなさい。お菓子美味しいですよ~。」

アレ「それ答えになつてないですよ。つていうが私のつていうのやめてくださいなんかうざいです。「ひどいっ!!」実はお菓子を食べにきた部屋の真ん中で倒れてたんですよ。しかもお腹の空きすぎで。」

アマイ「アレンが沢山くれたんですね。アレンとお話ししながら食べました。」

メフィ「なんか仲良くなっていますよ。」

「「仲良しなつたんですよ。」

メフィ「わづ私がいな間にそんな仲良くなつてゐるなんて……」

あることですよ……（泣）

アマイ「兄さん。ハヤコです。ね？アレン。」

アレ「アモンの言いつとおりです。メフィストさん。」

メフィ「……おっお義父さんと呼んでくれないんですか？！」

アレ「最近呼ぶ価値があるか分からなくなっているんですね。まあ反抗期だと思つといつぐだわい。」

メフィ「そんな……。」

部屋の端でいじけ始めたメフィスト。

アマイ「そろそろ帰りますね。兄さんもいいかげんいじかるのやめてくださいね。」

1時間後

アレ 「また今度呼びますね。お義父さんもつ立ち直ってください。

」

メフィ 「お義父さんと呼んでくれましたねーアマイモン、早く帰りなさいーシッシッ！」

追い払はりますのメフィスト。

「 」・・・ハア。」「

アマイ 「アレン。契約に關係なく遊びに来てもいいですか?」

アレ 「もちろんー使い魔の前にアモンは友達ですか?」

アマイ 「ありがとうございます。それじゃあ。」「

アマイモンはベヒモスを連れて帰つて行つた。

メフィ 「アッアレン。今の話を聞いてるだけでアレンがアマイモンの・・・

アレ 「アモンはさつき僕の使い魔になつましたよ。メフィストさんがいじつじしてゐ間に。」

メフィ 「なんですか――？！？」

す、じ、カマつぽー・・・。

メフィ 「それより一またメフィストさんになつてますよ。」

アレ 「え？？わざとですよ」

メフィ 「・・・いやですうう！お義父さんがいいですうう～！～！～（泣）」

アレンはこうしてメフィストがいじけている間にアマイモンを使いましてしまつた。だがそれよりもいじつじし始めたメフィストの相手をやる」との面倒くさを思い知つたアレンだった。

第七話　いつの間にか使い魔に。そして義娘の反抗期？（後書き）

メフィストがいじける間

アマ アレンとは話があります。

アレ そうですね！こんなに食べ物の話で通じ合える人全くいなかつたので嬉しいです！

アマ そうだ。僕をアレンの使い魔にしてください。

アレ え？！

アマ アレンの事気に入りました。それにアレンがしようとすること僕もお手伝いいたします。

アレ （何この子ー！ちょーいい子なんですがビーーーー）いいんですか？僕なんかで。

アマ アレンじゃなきゃ言いません。ベヒモスもアレンが気に入っています。

アレ ・・・わかりました。僕と契約してくれますか？

アマ もちろんです。ところで兄上はどうします？

アレ うーん。アモンが帰る前に声かければいいですよ。

アマ そうですね。あ、そういうえばこの間バクダン焼きを食べました。

アレ バクダン焼き? ! それはどんな食べ物なんですか? ! (キラ)

ヒーリング

ことでした。

第八話 原作突入！ 噴う青闇魔と白の道化師（前書き）

やつと原作入りです

1巻の最初から頑張るやつだと思います！

第八話 原作突入！ 噴う青闇魔と白の道化師

アレンは名歌に乗り、急いでいた。名歌もとにかく早く走っていた。二人の表情は必死そうでどこか焦つていた。その理由はアマイモンが朝早く尋ねてきて知らせてくれた内容が原因だった。

父上が物質界に行くと言つていました。もしかしてアレンが言つていたあの日つて今日なんじゃですか？？

アレ 「よりによつて任務がある時につ！」

* 燐 Side *

獅郎 「物質界に存在しながらにして・・・虚無界の神であるこのオレの“炎”をひく・・・お前は物質界を手に入れる為に不可欠だ！！」

燐 「うあああ、！！！助けてくれ・・・・！」

俺、このまま・・・死ぬのか？ジジイもこのままじゃ・・・！

「クラウン・クラウン。」

燐の目の前に、白いマントをまとった仮面をつけた者が現れた。男か女かも分からぬ。

獅郎「！！何もんだあ？」

「ただのエクソシストです。その人の身体返してもらいます
よ？」
　　サタン。「

ザシユツ!!

「ぐああああああーーぎゅあああーーてめえ何しやがつたあ

ああ
、
！
！」

「――ジジイー！お前――ツ！」

首に痛みを感じた燐。

「……」

？？ 「しばらぐ眠つていて……。今だ・・や・・らか・・・・・・

。

なんて言つて……る……ん……だ？

* 燐 side*ʃi n̩~

メイ 「アレン様！」

アレ 「燐君を向こうへ運んでくださいー。むづくめお義父さんが来るはずです！」

メイ 「分かりました！！」

獅郎 「力が抜けていく！！何故だ！！！こいつは死んでいないのに！！」

アレ 「僕のこの剣、クラウン・クラウンには退魔の力があります。だから切つても人は切れないと。 虚無界に帰りなさい。

サタン！

ザシユツ……！

獅郎 「あ、あああああ、……クソがあつ……！」

デナツ

アレ 「お父さん……！」

獅郎 「・・・・・はあつ・・・・・はあつ・・・・・。」

息がある・・・。間に合つたんだ・・・！

アレ 「よかつた・・・。間に合つて本拠地へ。」

メフィ 「アレン！——彼は無事ですか？！」

アレ 「息はあつますが危険な状態です！——急いで治療しないこと！」

メフィ 「扉を開けます。彼は名歌に運んでもらいましょう。」

アレ 「メイちゃん。頼んでいいですか??」

メイ 「もちろんですーお任せくださいー」

ピッ・ピッ・ピッ・ピッ・

理事長室の棚の奥。いわゆる隠し部屋に三人はいた。部屋は真っ白で真ん中には呼吸器を付けた獅郎がベッドにいた。アレンはベッドの横にある椅子に座り、獅郎の手をにぎっている。それをちょっと?羨ましそうに後ろから見るメフィストは、咳払いを一回してアレンに話しかけた。

メフィ 「もう命に別状はありませんが、いつ目が覚めるかは分から
ないそうです。」

アレ 「そうですか・・・でも生きててくれるならそれでいいで
す・・・。」

メフィ 「彼が生きている」とは私と貴女と彼を診せた医者と使い魔達だけです。・・・奥村兄弟には言わないんですか??」

アレ 「まだ言いません。一人にはこれから沢山の試練がまつります。特に燐君には。だから少しの覚悟では駄目なんです。」

メフィ 「藤本君の死。彼らには大きなものです。」

アレ 「ええ。だから、お父さんの死は彼らに強い覚悟をさせたはずです。それに決意も・・・。」

メフィ 「決意、ですか。」

アレ 「雪男君には燐君を守るという決意。今は燐君がお父さんを殺したつていう想いもあって混乱してるかもしません。でも大丈夫です。それに燐君はサタンを倒すこと。そして 横田を見つける事。」

メフィ 「……？」

アレ 「僕は彼の目の前でお父さんをクラウン・クラウンで切り付けました。きっと彼は僕とサタンが殺したと思つているはずです。」

メフィ 「アレン……。自ら憎まれ役になるなんて馬鹿ですね。」

アレ 「いわゆることですよ、メフィストさん」

メフィ 「もうパパとは呼んではくれないんですかあ？！？」

アレ 「誰もパパだなんて言つたことないですよ それより、燐君を迎えて行ってくださいよ。僕は本部に行つて来ないといけないの」

「」

メフィ 「おや？任務なんて入つてましたっけ？？」

アレ 「次の聖騎士を決めているらじこんです。だから補佐官を辞めに行くんです。僕が補佐したいのはお父さんだけですから（二口ツ

メフィ 「…そりですか。・・・それより、もう一度笑つてください…今の笑顔は写真に収めておくべきだ…」「早く迎えに行け（黒笑）」ハイ！！（汗）

お父さん。僕は貴方が目を覚ますと信じています。だからそれまで僕が守ります。それが補佐であり、娘である僕の役目だと思つから。

第九話 兄と弟 燐の決意！（前書き）

第八話から原作に入りました
原作の内容に入っている話は、タイトルに原作のタイトルを使つて
ます！

はい。どーでもいいですね。

ここまで読んでくださっている方に感謝です

第九話 兄と弟 燐の決意！

* 燐 Side *

なんなんだよ。大人しく殺されるか、自殺の一択だと？「冗談じゃねえ！！

燐 「仲間にしろ！」

メフィ 「？！？」

燐 「お前らがどう言おうが・・・・・・俺はサタンとか・・・あんな奴の息子じゃねえ！俺の親父は・・・」

俺と雪男を育てくれたのは・・・俺をいつも庇ってくれたのは・・・俺をいつも心配してくれたのは・・・俺を息子だつて、笑つて言ってくれんのは・・・

燐 「ジジイだけだ・・・！」

メフィ 「祓魔師になつて・・・どうするんです？」

燐 「サタンをぶん殴る……！」

メフィ 「フッ フフハ！ウハハハハハ！！グハハハハ！！」
「これはいい・・・・・ヤバイ 久々にきました！ハハハハハハ！」

燐 「何がおかしいんだよ！つかテーマの格好のほうがよっぽど
おかしい」「これは私の正装です！」

メフィ 「しかし、正気とは思えん！」

燐 「正気だ！！」

メフィ 「ククク・・・サタンの息子が祓魔師・・・・・！」

「いいでしょー！」

面白

燐 「ちゅー？ フレス卿！」

燐 「えついいのか！？」

メフィ 「但し貴方が選んだ道は荆の道。それでも進むとおっしゃる
のなれば。」

燐 「・・・俺はもう人間でも悪魔でもない。・・・だつたら祓魔師になつてやるーー。」

* 燐 side*~fin~

メフィ「お待たせいたしました。どうでしたか？入学式は、弟さんが新入生代へ「祓魔師にはどうやってなるんだ？」貴方まで私の言葉を遮るのですね・・・ぐすん。・・・まあやる気満々で結構ですが、まずは塾に通つていただきます。」

燐 「塾ー？」

メフィ「はい。そこではまずは祓魔訓練生として悪魔祓ペイジ
エクソシズムいを学んでいただく。塾は今日が初日です。案内しましそう。ただし！一つ警告です！貴方がサタンの落胤である事は秘密です。尻尾を上手く隠し、耳や歯なども誤魔化せられても炎はシャレにならない。自制してください。」

燐 「・・・・・努力するよ。」

メフィ「……結構です。では参りましょつ
ポンツ

燐 「いつ犬うー?!! 可愛い……。」

アレンと名歌はといづと、本部からの帰り道。列車の中で眠つてい
た。

メイ 「アレン様! もうすぐ学園に着きますよ。」

アレ 「ふわあ~。ありがとうございますメイちゃん。久しぶりに列車に乗り
ましたが、寝てしまいましたね。景色を見たりすればよかったです。」

メイ 「仕方あつません。上の奴らがなかなか辞める」とを認めず、
夜中も寝ずに話していたんですかい。」

アレ 「結局、復帰する気になつたら連絡するといじりでOKもら
えましたけど……。」

なんか面倒ですね~。それよりお義父さんは上手くやつたのでは
どうか……。とてもなく不安です。

アレンが列車の中で不安がついている頃、塾の教室では・・・。

雪男 「大人しく騎士本部に出頭するかいつそ 死んでくれ。

」

燐 「・・・なんだと・・・。お前・・・ジジイが死んだのは・・・まさか・・・俺のせいって思つてんのか！！」

・・・アレンの不安は見事的中していたのでした。その日の夜、理事長室から叫び声と必死な謝罪が聞こえたかどうかは、またまた名歌しか知らない。

第十話 食い散らかしとトサカ頭の出会い（前書き）

自分で改めて読んでうーん・・・つて感じだったので、書き直しました。

二人の出会いはなんか難しい・・・。

第十話 食い散らかしとトサカ頭の出会い

アレ 「・・・・蝦^{エビ}蟇^{バカ}を怯え^{リバ}せるとは思^{レバ}いませんでした。」

何かあつた時のために張つていました^{レバ}が、雪男君もいるようでしたし監視はいいみたいですね。

アレ 「さて。僕も準備しようかな。」

* 竜士 s.i.d.e *

竜士 「・・・・なんで廊下にたこ焼きが落ちとるんや。しかもその先には焼きそばパン?」

落ちて^{レバ}いる食べ物を追つていぐ。すると先のほうでズルツズルツと何かを引きずる音がした。

悪魔か・・・?

竜士 「・・・・・は?」

アレ 「?ふおへ?もぐもぐ

そこには食べ物があふれるくらい入った袋を引きずりながら、サンディッチを食べている女がいた。

竜士 「お前何しとるんや・・・。」

侵入者か？もしかして悪魔なんか？？

アレ 「 食事ですか？」

その女とはアレンだつた。

竜士 「んなもん見たら分かるわ！！俺が聞きたいんはなんでそんなに袋に食べ物突っ込んで引きずりながら歩きまわつとるんかいうことや！！お前が通つてきたところみてみいーたこ焼きやらシュークリームやら落ちすきや！！！しかも納豆巻きは匂いすきやねん！一どーにかせい！！！はあ・・はあ・・」

一気に言つた竜士は酸欠氣味になり、言われたアレンは目を大きく見開いたまま固まつていた。

アレ 「・・・そうですね。『迷惑おかげしました。（ペロロッ）』でもまさか落としてきてるとは、まったく気づきませんでした。」

竜士 「そんな入れとつたら落ちるに決まつるやう……。」

アレ 「・・・やうですね（笑）片づけておきます。注意してください
さつてあります。それでは、また。」

竜士 「へ・また会つかわからんやう。見覚えないし、IIJの学生と
ちやうんやう？」

アレ 「貴方とはまた会える氣がするんです。」ズルツ・・ズルツ

竜士 「美人やけど、不思議な奴やな。・・・・おい・・・言つたそ
ばからフランスパン落とすなや――！」

・・・今度会つたら名前聞くか。

竜士もどこかでまた会えるのではと考えていた。でもまさか塾で会
「ひとになるとは思つてもいなかつた。

* 竜士 side*~fin~

翌日、散らかっていた廊下はシミ一つなかつた。そして竜士以外にも落ちてる食べ物を見た人間が結構いたらしく、学校の七不思議と

なった。そしてアレンが理事長室に行つたとき、メフィストとその使い魔がやつれていいた事にアレンは気づかぬふりをした。

第十話 食い散らかしとトサカ頭の出でこ（後書き）

アモ アレーン。来ちゃいましたあ。

アレ アモン！お久しぶりですね。今日はどうしたんです？

アモ 遊びに来たんです。お土産にバクダン焼きを持ってきました

！。

アレ !!ホントですか？…さつそく食べましょう！

二人 いただきます。もぐもぐ

アレ おっ美味しい（キラキラ）

アモ もぐもぐつ名歌も食べますか？

メイ いいの？ありがとう！もぐもぐ。！美味しい…！

アレ メイちゃんとアモンって意外に仲いいですよね。もぐもぐ

アモ 使い魔同士ですから。たまに兄上についての愚痴を聞いても

らっています。もぐもぐ

アレ そなんですか…。メイちゃん…僕の話を聞いてくれますか？！もぐもぐ

メイ ……聞きますから、もう少しゆっくり食べてても…。

二人 メイちゃん…名歌。食事は弱肉強食なんですよ！

メイ そつそつですね（汗）

第十一話 奥村兄弟との出会い

アレ 「こんな朝早くから何かよつですか?」

メフィ 「なんか冷たくないですか? コホンツ 実は奥村兄弟に君を紹介しようと思いまして。階は違いますが、一応同じ田男子寮に住んでるんですよ。」

アレ 「それに塾にも通いますしね。」

「ソノコノツ 「ギリギリ。」 ガチャツ

雪男 「理事長。何か御用ですか?? そちうは・・・。」

燐 「どうしたんだ? 雪男。 ? 誰だそいつ??」

メフィ 「今日は彼女を紹介するために呼んだんです。アレン。」

アレ 「アレン・ウォーカーです。アレンと呼んでください。」

メフィ「彼女は事情がありまして入学式に間に合わなかつたんですねが、塾に通う事になつています。」

雪男 「 そうなんですか。奥村雪男です。悪魔薬学の講師をしています。授業の時は先生でお願いします。」

「俺は奥村燐！俺も塾に通つてんだーよろしくなアレンー！」

アレ「ようしぐおねがいします。」

メフィ「いやあ。アレンに友達が増えてよかつたです。パパは心配で心配で……」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
は
?
?

「「パパああーー?!!」

「むつ娘なのか?...」
「この?...」
「...」
「...」

メフィ「描かさないでくださいーー。」

アレ 「義理の娘ですよ。義理の。」

燐 義理を2回囁つたが。

雪 強調したね。2回囁つて。

メフィ 「それと踏は違つますが、アレンも田野子寮に昨日から住んでこますので」近所同士としても仲良くなれださこね」

燐 「お前もあそびに住んでんのか?...」

アレ 「わつですよ。ああ、食費は2000円ではあつませんけど(二千)普通生きていけませんし、貯めておいたバイト代があるんで。」

「」の間ちよつと絡ひできた奴らとポーカーをしてがつぽつヒュ(黒笑)

雪男 「(・・・アレンさんが黒くなつた・・・)でつでまむつすぐ授業も始まつますし、行きましょつか。」

アレ 「はこーではこつてきます。」

メフィ「いっしゅうしゃい。」

燐 「アレンはなんで入学式に出られなかつたんだ??」

雪男 「兄さん。アレンさんにも事情があるんだから。」

アレ 「いいんですよ。詳しく述べあの義父関係ですかね? そうだと
燐はなんで祓魔師になりたいんですか?」

燐 「なんだよ急に。」

アレ 「いえ、同じ場所で学ぶ仲間ですし色々知りたいなって。」

燐 「ふーん。俺はなーサタンをぶつ飛ばすんだ。」

アレ 「いい目標ですね。」

雪男 「笑つたりしないんですか？」「なつ 雪男！！」 聞いた人は大体爆笑ですよ？」

アレ 「僕もそんな感じですし。」

燐 「そりうなのかな？！あつあのを、白いマント着て仮面付けた奴みたことねえ？」

ドキッ

アレ 「さあ。その人がどうかしたんですか？？」

雪男 「兄がいうには、僕らの義父が死んだとき居たらしいんです。」

「

燐 「アイシジジイを剣で切りやがったんだ。でもなんかサタンみてえな嫌な感じはなかつた。だから会つてジジイを切つた理由を聞きてえんだ。」

アレ 「・・・そりうなんですか。」

その探しでいる者がここに居ると知つた時、貴方はどうするんでしょ？・・・。まあ、まず殴られそうな気がします。

雪男 「呼ぶまで」」で待つていても構えますか？」

アレ 「あつはい。」

燐 「あとでなー、アレンーーー！」

アレ 「はい。」

・・・お父さん。貴方がいつ田観めるかはわからないけど、守ろう
うと思っていたモノは僕が守ります。そしてこの生徒も・・・皆、
守ります。僕エクソシストは破壊者かもしだいけど、私ユズは救済者
でもありたい。

雪男 「では、どうだ。」

アレ 「はい。」

アレンは田の前の扉を開けた。

第十一話 奥村兄弟との出会い（後書き）

メフ ああーアレンは大丈夫でしょうか。もつ挨拶をしたのでしょうか。クラスの子とは話せているのでしょうか・・・ああああ！！！

アレヨエン！！！

アマ ・・・名歌。兄上を何とかしてください。

メイ 無理ですよ。あの状態のメフィスト様はアレン様以外にはなんともできません。ほっとけばいつかは治まります。

アマ いつですか？？

メイ ・・・。

アマ ・・・。

二人 ・・・。

早く帰ってきてください。アレン／アレン様。

第十一話 自己紹介と友達

ドアの向こうには雪男を含め10人ほどの人がいた。目の前には教壇の前に立っている雪男が微笑んで待っていた。生徒側には燐がキラキラした目で一番の前の席から視線を送つていた。そして後ろの方には驚いた顔をしたトサカ頭がいた。アレンは思わずクスッと笑つた。

アレ 「アレン・ウォーカーです。アレンと呼んでください(ニッツ)」

?? 「坊！あの子美人さんやあ WWW」

竜士 「耳元で叫ぶなや。志摩。」

アレ 「また会えましたね。僕の言つた通りだつたでしょ！」

竜士 「ほんまやな。」

雪男 「アレンさん。勝呂君と知り合いのようですね。じゃあ席は勝呂君の隣でいいですか？」

アレ 「はい。」

二人は改めて自己紹介をした。そしてすぐ授業が始まった。

アレ 「えっと、竜士。教科書見せてもらってもいいですか？」

竜士 「ああ。ええで。まだもらつてないんか？？」

アレ 「ええ。ちょっとした手違いで3日後には届きます。」

お義父さんが自分の漫画と一緒に売つけやつたんですね だなんて
言えない・・・。

先生 「では、ウォーカーさん。『』の第1章を暗唱してもらえますか？」

アレ 「あつはい。“太初に言ありき。”

アレンは唄のようにすらすらと言葉にしていった。周りはスラスラと暗唱する転入生に驚きを隠せなかつた。もちろん、隣の席の竜士

もだ。しかし竜士の場合、張り合える人間が現れたといつ嬉しさもあつた。

アレ 「～。」これでいいですか？」

先生 「よくできました！—！」

アレン 「アレンちゃんって頭ええのん？—めつりやあひかりやつたらん！—！」

アレ 「えつと貴方は・・・」

竜士 「こいつは志摩廉造。そつちが三輪子猫丸や。」

アレ 「志摩君と三輪君・・・。」

子猫 「気軽に子猫丸でええですよ。」

アレ 「じゃあ僕もアレンでいいですよ。」

志摩 「僕もれんぞ
で遮るん?！」

アレ 「分かりました。志摩って呼びますね（一ノ口）」
志摩 「かわええからOKですわ（デレ～）」

燐 「うわ、志摩の顔気持ち悪い。」
志摩 「ちよつ奥村君それひどない？！」

燐 「ははつ悪いーしえみ。隠れてねえで出でいこー」

しえ 「さやつーーーあ・・・あのアレンちゃん！わわわわたつ私
と、おつお友達になつてくださいーーー。」

アレ 「・・・・・。」

少し驚いた顔をしたまま固まつたアレン。
周りは「？」のような顔をしてアレンを見た。

竜士 「?.?ないした。アレンー」

アレ 「!あ、すみません。その・・女子に友達になつてと言わ
れるの初めてだつたので、驚いてしまつて・・・。」

志摩 「ええ? !?うなん? ! !」

アレ 「僕、髪と呪いがあるので恐がられてて・・・。同じ年の友
達は髪が初めてです!僕で良かつたら是非友達になつてください!」

しえ 「やつたあ!あ、私は杜山しえみ!しえみつて呼んで!-よろ
しくアレンちゃん!-!」

アレ 「ようじぐーしえみ!」

燐 「なあアレンのその田の周りのつて刺青なのか?なんかかつ
こいいだ。」

アレ 「!クスツ!かつこいいですか?燐は面白いですね。」

竜士 「いや、俺もアレンにあつてると思ひで。その銀髪も綺麗や
し。」

アレ 「さう綺麗・・・・・ありがとうございます・・・・・・

志摩子猫さん。坊が女の子褒める所、僕初めて見ましたわ。坊つてもしかして……。

子猫 僕も初めてや。本人は気づいてはらへんけど多分・・・。

二人 惚れどるんやろ? なあ。

アレ「へ？ 称号ですか？？」もう決めてますよ。」
マイスター

「そりなの？！アレンは何を取るの？！」

アレ
「僕は騎士・手騎士・詠唱騎士ですよ。」
ナイト テイマー アリア

「えー、三つも取るの？！」

しえみの驚いた声に驚いた4人が集まってきた。

子猫 「アレンさん、3つも取らはるんですか？」

アレ 「ええ。暗唱は得意な方ですし、剣を使って戦う時もありますから最初は2つにしようと思つてたんですけど。使い魔が居る手騎士ティマも取らうと思つてまして。」

竜士 「使い魔おるんか?！」

アレ 「はい。2匹居るんですけど可愛いですよ。」

しえ 「私もほしいなあ。お友達になりたい。」

アレ 「しえみはすぐに召喚できますよー！才能あると思つます。」

しえ 「やつ言つてもうらると嬉しいなあ。」

雪男 「雪さん。次は魔法円・印章術の授業じゃないんですか？移動する時間なくなりますよ？」

志摩 「ホンマやー急がなーー！」

6人は教室から全速力で移動した。
その中で妙に志摩だけが息切れをしていた。

第十一話 自己紹介と友達（後書き）

* 移動中*

アレ しえみ、もうすぐ着きますよ。

しえ ごめんねアレンちゃん!! 私を抱えて走らせちゃって・・・。
アレ 着物ですし走れないのは仕方ありません。それにしえみは軽
いのでまったく問題ありませんよ。

しえ ありがとうー!

志摩 はあつはあつー! アレンちゃんなんでそない早く走つて息切れ
してへんの? !

子猫 志摩さん。僕なんかバテて坊におぶつてもりりますよ。

勝呂 僕は朝走って鍛え取るからこのくらいは楽勝や。

燐 僕も余裕だぞー。志摩、おぶつてやうつか??
志摩 えつ遠慮しどきますわ・・・。

第十二話 友千鳥（前書き）

今回のテストは範囲が広くて頑張つてました！
更新が遅くなつてしまいすみません。

第十二話 友千鳥

魔法円・印章術の授業

ネイ「図を踏むな。魔法円が破綻すると効果は無効になる。」

あれがネイガウス先生ですか・・・。たしか召喚するのは屍番犬ナベリウスだつたかな・・・。あれ嫌いなんですよね~。臭いし、グロテスクすぎです。

竜士「アレン。どないした?ぼーっとして。」

アレ「...少し考え方を...あれ?しえみと神木さんは出来たんですね。」

竜士「俺らは出来んかった。」

アレ「うん、予想通りですね。」

竜士「どうこいつ意味や!...」

志摩「アレンちゃんの使い魔みたいわあーー！」

「俺モー！！！」

アレ「じやあ一匹だけ。」 時の破壊者の名において哀れな魂を救い
たまえ。』

ヒュウッと風が吹きながら現れたのは子犬の姿の名歌人。

メイ「く」う。

「同様」――――――――――

ネイ「狼牙の子供か？凄いじゃないか。そいつらはなかなか使い魔には出来ん。」

子猫「触つてええですか？」

アレ「メイちゃんは大人しい子ですから大丈夫ですよ。」

アレ「このトメイちやんつへこいつへ。」

アレ「本当は和歌とこまか。呼ぶのせいかりどもこいですよ。」

出雲「ねえ。 . . . その」

朴「頑張れ出雲ちやん。」

出雲「 . . . 觸つてもこい?」

アレ「ーはー(ハラシ)あつアレンヒト呼んでください。」

朴「私も朴でいいわよ。 . . . アレン。」

出雲「出雲でいいわよ。 . . . アレン。」

アレ「よひじくおねがいします。」

しえ「(アレンちやんす)ーーーー。私もお友達にーーー。」

メイ「わう～ん……。（アレン様……。僕を忘れないでください
い！泣）」

雪男「……はい終了。プリントを裏にして回してください。」

燐「ちよ・・・ちよつとボク夜風にあたつてへる。」

竜士「おひ、ひやしてここ・・・。」

出雲「朴！アレンも！お風呂入りにしておひー！」

朴「うん・・・。」

しえ「お風呂ー私もー！」

志摩「うはは女子風呂か〜ええな〜。」(ら覗いとかなあかんのやないんですかね!合宿つてそういうお楽しみ付きもんでしょう。)

竜士「志摩ーーお前仮にも坊主やるー。」

子猫「また志摩さんの悪い癖や。」

志摩「そんなん言つて一人とも興味あるくせに〜。」

雪男「一応ここに教師がいる」とお忘れなく。」

「 」 「 」 「 」 「 」

志摩「教師いつたつてアンタ結局何へやり?無理しなさんなつて。」

雪男「僕は無謀な冒険はしない主義なんで。それともう一人忘れてますよ?」

志摩「へ?「先生の言つとおりです。」 「あ、ああアレンちゃん・・・。」

アレ、僕がいるのもお忘れなく。そうそう最近テレビみて面白い技を覚えたんです。試していいですか？」

志摩「えりとー」「やつてええ。俺が許可するわ。」坊
「!!何
をこうりますの?!!」「こつあまーす。おつか。」ぎー やあああ
ああー!ー!ー!だだだだー!ー!ギブですー!ー!あかん!ー!ギブ!ー!

子猫「綺麗な逆エビですねえ。」

雪男「テレビで見ただけで出来るなんて・・・。」

志摩「ちょっと助けてえやーーー！」

「 」 「 」 「 」 「 」 「 」

アレ「しえみー無事ですか?」

卷之二

アレ「よかつた。朴さんも大丈夫そうですね。」

朴「杜山さんの・・・おかげ・・・。」

読んだから知っていたとしてもやつぱり不安にはなりますね。・
・一度父さんを助けて話を変えてしまつたわけですし、何か起らる
かもしけない・・・。

竜士「アレン、ぼけつとせんとはよ行くで。」

アレ「あつはい！」

ネイ「何を啼く。・・・いや悪魔の犬に成り下がつたこの祓魔師を
嗤つてゐるのか。」

一度ずれた時の流れは止まることはできない。戻ることもできない。
この一つのずれが未来にどう影響していくか、まだ誰も知らない。

雪 兄さん、なぜ裸に・・・。

・ なりゆきで ・・。 (早く行け ・・。)

志アレンちゃんの逆エビの刑やな！

ア
いえ、あれは志摩専用技にしたので

志^シなにそれー！！？ま、で！速^{ヒテ}ヒ以外にもあるん？！！

竜 そりや楽しみやなあ、志摩。

志　　楽しみなんは坊だけやろ？！――

雪 僕も楽しみです（二二）

子 僕もまたあの綺麗な逆エビみたいですね。

ア じゃあ今からでも

志 もう嫌やあああああ ! ! ! !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098w/>

え・・・？祓魔師って？？

2011年10月24日17時08分発行